

バ行・マ行の「よみくせ」

—— 発音から仮名づかいの問題へ ——

一連の古今伝授関係の資料や江戸初期から中期の源氏・勢語などの聞書類を播くと、意味・句切などの解釈に関する注記や、清濁・声点・発音・振仮名・振漢字などの「よみ」に関する注記が極めて多いことに気付く。そのうち、とくに清濁・発音・声点についての特殊な世界だけに通行した「よみ」を一般に「よみくせ」と称しているが、その中でも、Aと読んでもBと読んでも意味解釈上全く相違がないにもかかわらず、あえて「Aト読ム」とか「Bト読ム」の指定のある注記が多々存在していることが注目される。これらの注記のうち、清濁（連濁）^{注①}・バ行転呼音・声点^{注②}について、とくにその機能の面から私見をのべたことがあるが、この小考では、バ行音とマ行音（以下、b・mと略称）の注記について、前者と同じ立場から考察を加えようとするものである。たしかに、このb・m注記は、バ行転呼音と酷似した傾向を持つ。というのは、この小考で主たる

バ行・マ行の「よみくせ」

遠藤邦基

対象とする中院通茂（一六一三—一七二〇）の著と推定される『源氏清濁』を例にあげると、バ行転呼音関係の注記は六一箇所あり、そのうち九割以上の五七箇所「ワト読ム」のように転呼音で「よむ」ことが指定してある。残る非転呼音注記の四例も、ついち^ヒ（蓬生）のように標出語の表記に問題があったり、他の「よみくせ」との拘り——『平松家本上皇御講尺聞書』には「ついちち、ついちちと読也ついちちと地下の衆よむあしき……」とある——があったりして、これらは純然たる非転呼音注記とはいえないものである。同様に、b・m注記は次章に示すように、一九例のうち一部の例外（両形標出）を除いてすべてがm系の「よみ」を指定しているのである。つまり、表記とは異なる方の「よみ」の指定という点では、両者はまさに一致しているものといえよう。ところで、同じ「よみくせ」を記した資料でも、前者より三百余年溯った時代の『古今訓点抄』

(一三〇五)ではこの関係がいささか異なっている。同書には、ハ行転呼音関係の注記は九八箇所あり、そのうち一例を除いてすべてが転呼音で「よむ」ことを指定しているのに対し、b・m関係では僅か二例しかそれは見出せない。『源氏清濁』では転呼音注記とb・m注記との比率が六一と一九であったものが、『古今訓点抄』では九八と二であるということは、散文と韻文というジャンルの相違だけでは到底説明がつかない数字の開きを示していると思われる。と同時に、このことは転呼音がひきかねとなって生じた表記と発音との「ずれ」を指摘し、如何に書くかを指南した『下官抄』など一連の「仮名づかい」書にも、初期のものにはb・mの現象が全く触れられていないことも関係を持つものと思われ、その面からこのm音系の「よみ」の指定の意味することを考察してみようとするものである。

○

『源氏清濁』には、b・m系の注記が次の一九例存在する(声点・出典などの諸注記は原則として省略)。

- (イ) おほ^{も本}くし (桐壺)
- (ロ) なまうかひ (帚木)
- (ハ) しらへ^メ駒なへてを^メしなへて皆^メメトヨム (帚木)
- (ニ) うかひたる (帚木)

- (ホ) ねふたけに^ム (帚木)
- (ヘ) ねふたけ^{ムトヨム} (若紫)
- (ト) いざかしねふたき^ム (若紫)
- (チ) いなひぬ御心 (末摘花)
- (リ) うねへ女藏人^メ (紅葉賀)
- (ヌ) かはほり^{モリト云ヤウニヨム也} (紅葉賀)
- (ル) けふたう^ム (花宴)
- (ロ) たひしがはら^{ミトヨムヤウナルヨキ也} (蓬生)
- (ワ) ねふた^ム (朝顔)
- (カ) 水のおもふき^ム (乙女)
- (コ) いなひところ (行幸)
- (ク) いなひずなり (若菜上)
- (ケ) まぶしつべたましくツメタマシク (柏木)
- (コ) いなひで^ミ (総角)
- (ク) すへらき^メ (寄生)

そこで、右の本文について現存伝本の青表紙本及び河内本等とを比較してみると一つの興味ある傾向を見出す。つまり、(イ)・(ウ)の二例を除くと主要伝写本のすべての本文がb系であって、m系の本文は全く存在していないのである。例外とも思われる二例に対して、主要伝写本は次の表記を持っている。

はふりはうふりと可読にや、『惟清抄(天理本)』に「御ハフリハウブ
リト ムヘシ」、『伊勢物語抄(称名院・京大国文研藏本)』に「おほんは
ふりはうふりとよむへし」、『伊勢物語直解(実隆)』に「御はふりハウ
ム

注⑧)、『伊勢物語抄(今治市立河野信一記念館本)』に「はふりはう
りとよむ」などの注記が見出されるが、右のうち『伊勢物語直解』を
除いてすべてb系指定であり、それまでの一連のm系指定と齟齬を
生じている。もっとも、この現象に対しても必ずしも先にのべた

「よみの世界でのm系指定」と矛盾しているとはいえない。という
のは、先の『源氏清濁』や『読曲密訣』などはいずれも一七世紀の
聞書であるのに対し、右にあげた諸書は一五・一六世紀のものであ
って、その間に約二世紀近くの時代の差があること——この件につ
いては後述するが、時代を溯ると「よみ」の指定は「mデ読ム」だ
けでなく「bで読む」といった相互的なものがあらわれる——、ま
た、『伊勢物語一花堂読曲清濁』に「おほんはふりの夜一本はうむり」
とあるところから、一部の通行本には本文を「はうむり」とする異
文の存在も想定できよう。因みに池田亀鑑博士の『校本』では諸本
ともb系でm系の本文は報告されていない。そうすれば、これは
「はうむり」とする本文を一方で意識しての注記となり、(イ)~(ウ)の
一連の「よみくせ」の問題とは同列に扱えなくなるのである。した
がって、この(ウ)についての宗祇の流れをくむ諸注釈書の注記はあく

までも特別なものであり、先にのべたように、本文(表記)はb系
で、「よみ」はm系という傾向を否定する資料にはならないのであ
る。

○

ところで、聞書類における既述の「ト読ム」注記は、一体どの
ような意味を持っているのであろうか。再び『源氏清濁』から「ト
読ム」注記を拾ってみると次のようになる。

① 長音に関するもの

こきてんの女御コウキデントヨム
からうす加郎果トヨム カラフスラノ字引テヨム
しやうひんしやうびサモチテ読
さう

(桐壺)
(夕顔)
(賢木)

② 撥音に関するもの

きみたち
ントヨム
歌ずしかちズジ ズンシトモヨム

(若紫)
(帚木)
(若紫)

③ 音便に関するもの

ひとつきさきはら
イハラトヨム

(若紫)

④ 転呼音に関するもの

ゑんじうけひけり
イトヨム
やぶはら
注⑨)ハトヨム

(蓬生)
(蓬生)
(蓬生)

⑤ 半濁音に関するもの

ちかくてみ^{注⑥}ん人^{上ラハネタル時アイニ}半仮名ニヨム事也

⑥ 字音に関するもの

みこたち大臣より^{指人はおと、不指人ハ大臣ト音にてよむ歟}

あみたの大しゆ^{スト五種ニヨム}

⑦ 訓に関するもの

ニシウヨネツ
廿よねんハタトセアマリトヨムヘキ歟

⑧ 特殊なもの

御となふらヲ、ントノあふらあノ字字きこえぬやうに

イツカムユカ
ムユカトモムイカトモキコエヌヤウニ
五六日
ヨムガ可然歟

⑨ その他

てんくうこたま仮名ノマ、誌

あなはらノハラトヨム

右の諸例で明白なように、「ㄷト読ム」注記の目的としていることは、いずれも「仮名(文字)のままでは読まない」「ことを指定——」の「ハト読ム」は非転呼音であることを示すと同時に濁音の「バ」でないことを示し、⑨の「仮名ノママ読」の指定は、「天狗^{テング}」とは読まないことを確認したうえで念を押す形で「てんくう」と注記したものである——したものである。勿論、その裏には当然のことながら「仮名のまま読む」原則が存在していることはいうまでもない。

(帚木)

(若紫)

(鈴虫)

(紅葉賀)

(葵)

(帚木)

(夢浮橋)

(空蟬)

マ行音に関する先の(ハ)(フ)(フ)の諸注記も、まさにこれと同じ目的で加えられたものといえよう。このような「よみ」と「表記(仮名)」の「ずれ」の問題は、仮名が国語の音韻をそのまま写すものであった時代、つまり、「仮名の原則」が生きていた時代であれば生じる可能性は全くないのである。なぜならば、そうした時代であれば音韻の変化に従って表記も変化する(この場合ならば本文はm系に改められることとなる)からである。とくに語中尾のハ行音のように表記と発音とがすっかり遊離してしまい、むしろ表記どおりによまないのが通常である現象まで生じてしまった時代に、古典(源氏や勢語)を如何に「よむ」かという問題は、多少とも昔の発音を使うか、まったく当代的な発音で「よむ」かの問題もからまってくるだけに、注記が複雑化してくることは容易に想像できよう。物語類だけでなく古今集などの韻文関係の諸注釈書や聞書類などにも「ㄷト読ム」注記はごく当り前に見出せるのに対して、一方の「ㄷト書ク」注記が全く存在しないのは、この間の問題を考えていくうえで極めて重要な示唆を与えてくれる。つまり、「ㄷト書ク」とは、換言すればいかに表記するかという仮名づかいの問題である。それに対して「ㄷト読ム」の世界は、当時の講釈が伝統的表記法——その大半は定家仮名づかいの洗礼を受けているが——に従って表記されているいわゆる古典を、音声に介在していかに「よむ」かに目的があっ

たのであり、さらに受講する者は、一言一句違えぬように聞き取って講釈する側の權威を受容したのである。m系の「よみ」の指定も、その該当する箇所を不注意にb系でよむことのないようにとの心覚えの注記かと思われる。また、一部の伝授関係の書や聞書類に、意味の識別に機能している場合はともかく、それとは殆んど拘りのない形で清濁（連濁）や声点注記が極めて詳細に加えられているに出合うが、その目的とするところは、その「よみ」を伝承すること
 で「^{注⑥}權威の傘」の加護を受けることにあったものと思われる。たしかに、b系・m系のいずれで「よむ」かは、先の清濁（連濁）・声点の場合と同様に、或いはそれ以上に意味との拘りは持っていないのである。例えば(二)の場合、かりに「うかび」ならば「水に浮かぶ」、「うかみ」ならば「心に浮かぶ」であるというように、両者の間で意味分野を分担させているのであれば、そのいずれを指定するかは解釈と関連を持ち、これに関する注記は重要な機能を有していることになる。しかし、いうまでもなく両者の区別が意味にまで及ぶものは、管見では

○馬の鞭をぶちはわろしといへり鷹狼の時にはぶちといふとぞ
 (『片言』巻四)

という語頭の交替形くらいであろうか。そのほか一部の方言でその区別のあることが報告されているが、それもまず特殊な例外と断じ

てよからう。そうなると両者の区別は表面上は、

・カタブケ・ル カタムケ・クルの条を見よ。なぜなら、B字を用いて書かれるけれども、話し言葉ではMを以て発音されるからである。
 (『邦訳日葡辞書』)

・ウソムキ・ク・イタ ウソブキ・ク・イタと書かれる……。

(同右)

・人のいたみを^{とよ}を とぶらふといふはよろしからじと云り。

とむらふといふやうにいふべし。仮名にはとぶらふとかくなり

……。
 (『片言』巻二)

といった、表記(仮名)ではb系を、発音(「よみ」)ではm系という相違のみに帰納できそうである。これは、書かれたままに発音するのではないということであり、また、こうした記述のあることを裏返しにすれば、現実には表記のままに「よむ」人も多いことを意味している。もつとも、ここで「表面上は」と限定したのは、右の『日葡辞書』や『片言』の記述で明白なように、m系はあくまでも当代的な発音であり、源氏や勢語、さらには「よみ」に関しては前者と比較にならない程の長い伝統と權威を持つ古今集にもこの当代的な「よみ」の指定——数量的には極めて稀な例であるが「駒なへていき見にゆかん(巻二の一―一)」に、「なめてと読(シ)。ならへて也(『古今私秘善』)」とある——のあることがいかにも不審に思

われるからである。一般に「よみくせ」とは、当代性とは対極にある「古いもの」あるいは「古いと推定されるもの」を求めるのが常道であり、事実、現行の謡曲に残存する「四つがな」の区別や拗音のワル注記、また特殊な連声の発音など、すべて実際に時代を溯ればそのような発音が存在したか否かの問題——その中には「古さ」を出すためにわざとつくられたものもある——とは無関係に、古色を帯びた非当代的であることによって一つの権威や特殊性を誇示しているものなのである。このことは謡曲だけでなく、能狂言・平曲・仏典など伝統的な「語り物」すべてにみられる共通の傾向といえよう。いずれも当代的でわかりやすい口語的な「語り」よりも、古典的で理解しがたい文語的な「語り」や「よみ」の方がはるかに有難味があり、権威や権威と結びつきやすいからである。それにもかかわらず、b・mの世界ではより当代的と思われるm系の「よみ」を指定しているのは、何らかの特別の意図があるのかもしれない。

○

そのためにはまず、b・m両者の関係を歴史的に辿って、時代差によるその受け取り方を「仮名づかい書」などを対象にして、ハ行転呼音注記との違いなどと比較して検討することとする。

かなづかい意識は、表記と発音との「ずれ」、換言すれば「仮名の法則」が破れて、書かれたとおりに発音されることがなくなつて

ハ行・マ行の「よみくせ」

のちに、表記する側の規範意識として生じたものであるが、奇妙なことに初期のかなづかい書にはこのbとmの問題は触れられていない。たしかに『下官集』の「嫌文字事」の「ふ」の項（『国語学大系』九巻）に、

今入^みみ 神な^ひひ うかへる涙 かな^ふむ あはれ^ひみ すさ^ふむ えら^ひみ

の六語にm系の小文字が加えられているが、この六語は「ふ」の項に分類されながら、「ふ」の語は二語だけであり、また、「神なひ」の右肩に「今入」と注記があり、「あはれひのあとに「さやく^く」といつく^く」といった仮名づかいとは関係のない語句が加わっていること、さらに『下官集』を増補改訂した行阿の『仮名文字遣』にはこれらの語句が全くみられないことから、この部分は後人の補入と認定してよかるう。bとmとの問題が仮名づかい書に姿をあらわすのは、定家仮名づかいの末書で、一条兼良の著と伝えられる『仮名遣近道』を嚆矢とする。ここには、

一、ひの字をみとよむ事

かなしひかなしふ^悲 あはれ^ひ憐あはれ^ふ くるしひくるしふ
 苦 たふとひたふとふ^貴 たのしひたのし^ふ案 かみなひのみ
 むろ神南備御室

とあり、また、江戸時代初期に成立した『一步』（著者不詳）にも、

一、ひの仮名をみの声によむ事^付 ^{ふの仮名をむの聲によむ事}

えらひえらふ うかひうかふ かなしひかなしふ すさひすさ
ふ
是等まみむめもの五音にかよふ詞なるを如此かななを書来れり。
但みとむとの仮名を書たる物もあり。ひふみむの内はいづれを
も書敷よくしれる人に尋ぬへし。又右同じ五音に通ふ詞なくさ
みなくさむこのみこのむ是等にひとふとはかゝす。此類多し。
五音にかよふといへはとてまみむめもの五字にかよふと心得へ
からす。

とあり、そのほか『初心仮名遣』（二六九一刊）にも、

一、ふをむに読事 是はふと書なからむと読なり。

けふり煙 ねふり睡 かふり冠 さふらひ侍 とふらひ甲

とある。いずれもb系で表記された文字をm系で「よむ」ことにつ
いての解説であり、ここでは、ハ・ワ・ア三行の場合と同様の「仮
名づかい」の問題として取扱われている。このように時代が下るに
したがって、bかmかの選択は発音の問題から「仮名づかい」の間
題へと変化するのである。すくなくとも『観智院本名義抄』の時代
には、オモムク（赴・仏上六〇・声点略・以下同）、トモシヒ（燈
・仏下末五二）、クルシム（困・法下八五）のようにm系の仮名の
横にb系の仮名のつけられたものと、その逆の形態をとるヲモフク
（化・仏上三三）、マホル（護・法上五一）、ムセフ（咽・仏中二九）

の両形のあること、さらに同書にはカガジ（鹽・僧上二二）、ツ
マヒラカニ（曲・僧下九〇他）などのマ行の濁音仮名が存在するこ
となどから、両者の関係は「如何に書くか」という仮名づかいの問
題だけに限定して解釈することはできないのである。やはりこの現
象は、当時のバ行頭子音が〔m〕であるいは〔ɱ〕という強い鼻音
性を有していたために、それをmで聞きとるかbで聞きとるかの音
声的な要因にあったとする方がよさそうである。『水源抄』（一三五
八頃）の「タヒシカハラ事、清少納言枕草紙ニ民代トカケリミトヒ
トハカヨフヘシ」や『仙源抄』（一三八一）の「たびしかはら民代
也……ミトビト同音（傍点・筆者）」などは、まさにその間の事情
を物語っている。そのことは、謡曲や平曲の謡い方（発音）につ
いて細かく規定した指南書類の記述をみても明白である。例えば、
『平家物語指南抄』（二六九五刊）の「読曲之事」の項に

ウカヒ トブラウ カヤウノ字ハウカミウカヒトモキコエヌヤ
ウカタルヘシ

とある。ほぼ同じ内容の記述が『音曲玉淵集』（二七二七刊）にも、

。ばびぶべば 比濁音をさけて直にまみむめもと唱ふ事いかゞ強
く唱へては尤いやし和かに濁るへし。

野 さびしき [みトの間に濁るべし]。

社 なべてのはなの[めトの間になふへし]。

老
晨鐘せきぼん〔ぼトの間ヲ唱ふへし直ニもんとはイカ、。

（該部分のみ摘出・卷一四〇）

とある。この「bトモトモキコエヌヤウニカタル」とか「bトmノ間（の音）ニ唱フ」とは、極めて抽象的で曖昧な表現であるが、これは文字で表記すればbでもmでもない音で「よむ」ことの指定であって、畢竟、発音を文字で支えきれない状態を示しているものと考えられる。換言すれば、謡曲や平曲の舞台となった中世のb系の頭子音の音価が〔p〕ではなく、先にのべたように鼻音性をもった〔m〕か〔mp〕であったことをあらわしているのである。この種の注記は、仮名が音素をあらわしえないため、仮名でb行やマ行に表記してしまうと、そこに実際の発音との間に「ずれ」が生じてしまうのを防ぐ苦肉の策といえよう。謡曲や平曲の「よみくせ」に右のような注記のあるのは、いずれもが「伝統を重んずる守旧的な発音」を標榜したためと思われる。つまり、これらの作品では一時代前の非当代的発音——当代的発音ならばこのような注記は一切不要である——で「よむ」ことによって「古さ」と「權威」とを保守したのである。ところで、中世末から江戸初期にかけてb音の頭子音が〔p〕や〔mp〕から〔q〕へと鼻音性を脱落^{注⑥}させることによってb音の音価が変化したために、それまでのb音（bともmとも聞きとれるような音）が、はっきりといずれかの音に分離してしまい、

バ行・マ行の「よみくせ」

そこに、書くとおりに「よま」ない、或いはその逆の「よむ」とおりに「書かない」という「仮名づかい」が必要となったのである。これが先の兼良の『仮名遣近道』や『一步』さらには『類字仮名遣』（二六六）『初心仮名遣』（二六一）『和字正濫抄』（二九九五）などの一連の「仮名づかい書」の記述へとつながるのである。源氏や勢語の「よみくせ」の中で、bとmの関係が常に「mト読ム」という一定の方向性を示しているのは、両者が発音の問題から「仮名づかい」の問題へと転換したことを明白に示しているのである。

○

バ行の頭子音が〔mp〕や〔m〕から〔q〕へと変化することによって、バ行音が音声的にマ行音と訣別し、それまで曖昧な形で両者の間を「ゆれ」ていた表記は、そのいずれかを選択せざるをえないはめとなった。しかし、現実には源氏・勢語といった平安朝文学作品には相当数の写本があり、そのすべてが伝統的表記法によって書かれていて、発音が時代の波をかぶって変化——この場合はbからmへ——したとしても、原文の表記には何の影響も生じないのは当然のことである。しかし講釈の場では、b系でもって書かれた本文を部分的にはいわゆる当代的発音によるmによって「よむ」形態をとることもあったと推測されるのである。勿論、いうまでもなくその場合、すべてのb系をm系に「よん」だというのはない。時

には、いわゆる表記のままb系で「よむ」こともあったのではない
かということである。或いは「よみ」としては、b系を原則とした
といった方がよいかもしれない。そしてその表記のままのb系で
「よむ」なりに、多少とも当代的なm系を「よみくせ」として鏤め
たのではなからうか。ともすれば、一般には非当代的なものを「よ
みくせ」と称しがちではあるが、このmとbとの関係においては、
むしろ当代的な「よみ」を「よみくせ」として指定していることに
なるう。このことは、最初にあげた(イ)の二七例のm系の指定と、
左にあげるそれに反するb系の表記(双点注記のあるもの)の共存
が一つの回答を示してくれることにならう。

(イ)しらへ(帚木)——しらべとゞのへ(花宴)

(ロ)いなびところ(行幸)——いなび給はぬ御心(末摘花)いなび

(薄雲)

(ウ)さぶらひたるおきな(勢語・七六段)——さぶらひわらは(夕

顔)さぶらひと(東屋)

(オ)とぶらふやうにてとむらふやうにてとむへし(一一一段)——とぶ

らひ給こと(朝顔)

右の(イ)～(オ)の四例は、いずれも当代的な「よみ」を「よみくせ」
として指定したものであり、その下段は、おのおの表記に沿った旧
来の「よみ」そのものなのである。つまり、物語の「よみ」として

は原則的には下段のb系を、そして一部例外的に当代的なm系を指
定して、その部分を一層「耳だつ」ものとしたのではなからうか。
m系の「よみ」の指定の目的は、このような何の変哲もない当代的
な「よみ」をさりげなく指定するところにあったと想定するのであ
る。

△注△

- ① 拙稿「古今訓点抄の濁音―読み癖の解釈を通して―」(『奈良女子大文
学部研究年報』二五号)同「よみくせと連濁―源氏清濁の疊語を中心に
―」(『国語語彙史の研究』五・近刊)
- ② 拙稿「読み癖注記に対する一解釈―ハ行転呼音に関して―」(『叙説(奈
良女子大)』五五年一〇月号)
- ③ 拙稿「古今訓点抄の声点―その機能について―」(『叙説』五七年一〇
月号)
- ④ 『源氏清濁・岷江御聞書』(京都大学国語国文学資料叢書三七)
- ⑤ 池田亀鑑編「校異源氏物語」(『源氏物語大成』)による。
- ⑥ 土井洋一「音韻交替についての一解釈(上)―バ・マ行のゆれをめぐっ
て―」(『学習院大学文学部研究年報』十輯)
- ⑦ 池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究・校本篇』による。
- ⑧ 不破浩子氏の調査による。
- ⑨ 「は」は不濁点である。
- ⑩ 人の右肩に三点がある。注④の拙稿「解説」一八〇頁参照。
- ⑪ 亀井孝「ガ行のかな」(『国語と国文学』三三卷九号)
- ⑫ 注①②③参照。
- ⑬ 柴田武「日本の方言」(『岩波新書』六九頁)。
- ⑭ 「どの仮名で書くべきか疑わしいもので、かなづかいについて疑わし

いものを考え定めること（山内育男）の意である。

⑮ この件については伝本諸本との校合や詳しい考証を加えるべきであるが紙数の関係で結論だけを記した。

⑯ 築島裕『平安時代の訓読語につきての研究』五一―八頁。桜井茂治「平安院政時代における日本語の鼻音について」、『国語国文』四二卷一―二号）拙稿「回帰と類推―マ行の濁音仮名とその背景―」、『岐阜大学教育学部研究報告』二一―号）

⑰ 石田元季校「平家物語指南抄」、『国語国文研究』第八輯）

⑱ 拙稿「連濁語のゆれ」、『国語国文』三五卷五号）同「ギリシタン資料の表記面からみた二面性」、『岐阜大学国語国文学』七号）など。